

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑨

一如の救い

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第20回、21回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第20回では、「本願文（第一願、第二願）」について、第21回では、「本願文（第三願）」についてセンター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行なわれた第18回からその一部を紹介する。（囑託研究員 越部良一）

■ 主語が消える

「如来の浄土の行」（『真宗聖典』14頁、東本願寺出版部。以下、『聖典』と略称）とありますが、この『無量寿経』における「行」という言葉は、わかったようでわからない。親鸞聖人は、行という言葉に新しい意味を読みとっていかれた。つまり、人間の行為というよりも、人間に、人間の境界ではないような境界を与えてくるようなはたらき、そういう意味でも行という言葉を使おうとする。それは、普通の行為、われわれが何かに向かって行為するのは全然意味が違うのです。

鈴木大拙先生は、親鸞のこの「行」という言葉を、どう英語で表すことができるかと、随分と苦勞して考えておられるのですが、南無阿弥陀仏という行為は、自我が消える。述語的な動詞の行為には必ず主語があるわけですが、南無阿弥陀仏が行為となるときには主語が消える、という言い方をしているのです。これも考え難いところです。

われわれは、行為するときには、主語があっ

て行為する、私が、何々をすると考える。ところが、親鸞が「南無阿弥陀仏は行だ」と言おうとするときに、まあ、日本語は主語を書かなくてもわかるから主語がないというふうにもただけでないわけではないのですが、南無阿弥陀仏を称するというときに、主語がないのです。私が称えるから行だとは書いていない。つまり、主語があって、述語があるがごとくに、凡夫があって、発音したら行だというのは、そういうことをいくらやっても、本当に浄土に往けるとは限らないわけです。これは、つまり、一如の行ということがあって、一如というときには、主語と述語が分かれぬ。いま、人間の境界でないような境界を与えましたが、その境界も、主語があって境界があるのではなくて、境界と主語とは分かれぬ。

ところが、浄土の、いわゆる教学となると、もう二分化して、仏が居て、衆生が居る。自分があって、環境がある。自分がこっちの穢土にいて、浄土があっちにある。そういうふうには、何でも二元的に語るわけです。

■ 本名は南無阿弥陀仏

「無上殊勝しゆじやうの願を超ちやう発ほつせり」（『聖典』14頁）、法蔵菩薩が世自在王仏の教えを聞いて、特別の願を發したと。この言葉を親鸞はなぞりにせず、『教行信証』の「信巻」に取り上げておられます。法蔵菩薩が無上殊勝の願を超發するということと、われわれが南無阿弥陀仏を信ずるということとは、同じことだというのが親鸞の押しえです。われわれではわからない。私が信ずるということと、法蔵菩薩が超發した

ということとが、なぜ同じだと。無限の距離があるのではないかと思うのですが、その無限の距離を一挙に一つにするのが超発だと。この愚かな身に、本願の教えを聞いて、ああ、そうだな、南無阿弥陀仏しかないなという心がもし発ったなら、その心は、法蔵菩薩が超発したということなのだ。

私どもが、経験してわかるとか、感ずるとか、信じたというレベルと、それを生み出してくるような大きなはたらきが回向として来ているのだということとを、親鸞はきちっと分けている。鈴木大拙先生は、それを、分けるけれども、分けるのは方便であって、実は一つになるのだという書き方をするから、浄土真宗の学者はそれを嫌うのです。でも、どっちもどっちのところがあるのです。だから、鈴木先生は、曾我量深先生とやり合ったときに、やり合っていくと、最後のところは同じになると言う。同じになるけれど、ちょうど一つの壁の両面みたいなもので、あんたの見ている壁とこっち側の壁とは違うのだというように、お互いに許さないところがでてくる。だから、同じと言ってしまうと問題がある。でも違うと言っても問題がある。得ている境界は、ほとんど重なる。

例えば、曾我先生は、南無阿弥陀仏というのは、みんな南無阿弥陀仏になるのだと。「私は曾我南無阿弥陀仏です」などと言いつつわけです。何を言いつつやらと思うようなものでね。一人ひとり、みんな南無阿弥陀仏です。南無阿弥陀仏が本人そのものです。本名は南無阿弥陀仏です、などと言うので、聞いている人間は、ちんぷんかんぷんです。でも、それはほとんど大拙さんが話すのと同じようなレベルにあるのです。

われわれは禅と念仏とは全然違うように思っているのですけれども、実は、日本に来て分かれたのです。朝鮮でも、中国でも、ベトナムでも、禅浄一致です。禅の修行と、念仏の行とを重ねてやっている。日本に来て、法然上人から念仏と禅が分かれた。分かれることによって、何が明らかになったかということ、人間の愚か

さ、罪の深さ、その自覚ですね。それが非常に鮮明になった。それが鮮明になることによって、有限なる人間の分限が本当に自覚されるという点で言うなら、非常にすっきりした面がある。

けれども、どれだけそういう面がはっきりしても、仏教であるという本質は変わらない。仏陀の教えである。仏陀の教えであるということは、一如のあり方が存在の本来のあり方だということです。われわれは、たいてい二分した形でものを感じたり、考えたりしているけれども、存在の本来に帰るべく命を生きている。その場合には、鈴木大拙先生が見てくださったような、いわば不二の面が、大事な面ではないかと思うのです。鈴木先生の表現は、なかなか難しいし、いわゆる真宗的なものの考え方、教学の言葉の約束からすると外れているように見えないこともないのですけれども、しかし、仏教の本質からよくよく考えてみると、やはり大事な点を押さえている。

何でも二分していく、例えば、穢土の人間が浄土に往くのは死んでからだとか、それでは仏教でなくなってしまいます。根源的に仏教ではなくなってしまいます。浄土真宗は、愚かな衆生に罪を教え、凡夫であることを教えるけれども、凡夫と無限なる存在との、その絶対矛盾を撰して、一如の救いを与えようとする。そういうところに、この「無上殊勝の願を超発」するということの意味があるのです。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は、公開（無料）で開催しています。

記

日時：2009年3月 2日(月)午後6時30分～9時
4月 休 会
5月26日(火)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：「真宗聖典」大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>